

《研究動向》

現代ロシアの自国史教科書の動向

—20世紀史の描写を中心に—

立石 洋子*

Textbooks of national history in modern Russia : A description of the 20th Century

TATEISHI Yoko

1. はじめに

ソ連解体後のロシアでは、公的自国史像に関する議論がペレストロイカ期の政治改革のなかで活発化した歴史論争を引き継ぎながら展開してきた。しかし2000年代に入ると特に第二次世界大戦の評価を中心として旧ソ連諸国との対立が目立つようになり、ロシアの自国史論争に新たな側面が加わることになった。このなかで大統領府と教育科学省は教師用のロシア現代史教科書の作成や「ロシアの利益を害する歴史の歪曲に対抗する大統領委員会」などの手段により、学校の歴史教育の内容を統一しようとする試みを続けてきた。この背景には、諸外国との歴史認識の対立だけでなく、高等教育機関への入学に必要な統一試験への対応や教科書の水準の保障などを理由として自国史教育や教科書の内容に一定の枠を定めるべきだとする意見や、公的歴史像の安定性を求める声、教科書の数が多すぎて選択が困難であるといった見解が教師や保護者から表明されているという要因もある〔Вяземский 2014 : 54, Лазебникова, Королькова 2014 : 13, 立石 2015 : 31-33〕。

しかし、知識人やマスメディアには政治による学術研究・教育の統制に対する警戒が根強く存在しており、自国史教育や教科書を統制する政策は現在のところは実施されていない〔立石 2015 : 34-38, Лазебникова, Королькова 2014 : 12, Личман 2012 : 4, Кочегаров 2013 : 49-50〕。しかし近年、この問題に関する政策が新たな展開を見せている。そこで本稿は、近年の新たな動向を示す事例として2013年に発表された「祖国史の新たな教科書・方法論参考書の内容（新たな教科書の内容）」の内容と、それをもとに2015年に新たに推薦教科書に指定されたドロファ社の20世紀史教科書を検討する。

*日本学術振興会（首都大学東京）

2. 「新たな教科書の概念」の作成と自国史教科書の審査

ロシアの学校教育では国民教育省によって教科書推薦制度が定められており、この制度に基づき毎年同省の推薦を受けた教科書が発表される。しかし、2013年10月に発表された「新たな教科書の概念」は、自国史教科書の推薦制度に新たな状況を生み出している。「新たな教科書の概念」とはプーチン大統領の委任により、ロシア歴史協会が中心となって作成した歴史教育のための自国史の基本的解釈であり、歴史教育の意義や授業での教科書の位置づけについて述べた部分と、古代から2012年までのロシア史上の主要な史実の基本的評価と教科書に掲載すべき史実、用語、人名、年表を列挙した部分、「[ロシア史の困難な諸問題]の一覧」からなる〔Концепция〕。2015年に教育科学省は、この「新たな教科書の概念」を基準としてロシア史教科書の審査を行うことを決定し、最新の推薦教科書や新たに作成された教科書が審査の対象となった。審査はロシア歴史協会が中心となって行い、科学アカデミーや教育アカデミー、モスクワ国際関係大学、ロスアルヒーフ、教師協会も加わった。この審査の結果、2013/14年度には9冊、2014/15年度には5冊あった20世紀ロシア史の推薦教科書は、2015/16年度には3冊へと大幅に減少することになった。このことから「新たな教科書の概念」の作成は、今後の教科書推薦制度や教科書の内容に大きな変化を与える可能性もあると考えられる。本節では「新たな教科書の概念」の20世紀史に関する部分から、別稿（〔立石 2015, 立石 近刊〕）で検討した歴史教育の意義や大祖国戦争期以外について述べる。

2.1. 20世紀史の概説

概説部分は9部からなり、20世紀史を扱うのは第5部から第9部である。まず第5部「[大変動]の時代のロシア 1914-1921年」では、この時期はロシア史だけでなく世界史でも特別な位置を占めるとし、1917年に始まるロシア革命、「ソ連の実験」とその世界史への影響は20世紀史の最も重要な史実の一つと考えられているとする。そのうえで鍵となる史実として第一次世界大戦と革命、内戦を挙げ、内戦をロシア社会の深い亀裂が起こした「民族的悲劇」とし、戦争と革命が招いたのは国家の荒廃と「宗教的、民族的「アパート」への分解」であったとする。教科書に描くべき重要な史実や用語としては、臨時政府、「二重権力」、ソヴィエト権力、産業の国有化、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）、プロレタリア独裁、階級闘争、ソヴナルコム、戦時共産主義、内戦、労農赤軍、宗教と国家の分離、亡命の第一の波、「ロスタの風刺の窓」、ボリシェヴィキによる記念碑設置計画などを列挙している〔Концепция：46, 49〕。

次に第6部「1920-30年代のソヴィエト連邦」では、ネップによって国家は戦争と革命の破壊から回復へ向かったとし、1922年に誕生したソ連は少数民族の文化の発達を目指し、プロレタリア国際主義の理念に基づいて民族間の問題の解決を試みたとする。さらに世界でも前例のない社会改革の結果、浮浪児の減少、識字率の上昇、男女の平等、社会衛生学の導入、母子保護、無償の初等普通教育の導入などの分野で大きな成果を収めたと述べる。しかし1920年代末にネッ

ブが否定されると、工業化が非常措置と農村の犠牲によって強行された。その代償は非常に大きく、生活水準はネップの時代よりも低下した。さらに強制的な農業集団化と穀物調達には豊かな農民に対する過酷な抑圧を伴い、飢餓や伝染病を拡大させたと述べる。

次に、1920-30年代の国家の発展は相矛盾する特徴を持ったと述べ、産業の近代化の促進や文化革命、教育の発展、かつてないほどの幅広い層の社会的上昇、公的領域への国民の熱意と参加という肯定的な現象も見られたとする。1936年に採択された新憲法はプロレタリア独裁を正式に廃止し、法の下での平等を宣言した。しかし、他面ではソヴィエト民主主義は硬直化し、検閲の強化や「人民の敵」探しが続き、1937-38年には大規模な政治的抑圧がピークに達した。「スターリンの社会主義」の特徴は超中央集権化と指導者の独裁にあり、党組織がソヴィエト権力に取って代わり、政治や経済の課題の解決のために行政的手段が優先されたのであった。この時期に関する重要な史実や用語としては、ネップや協同組合、クラーク、ノームクラトゥーラ、労働者学部、コムソモール、コミンテルン、プロレトクリト、社会的「上昇」、戦闘的無神論者同盟、女性の解放、共産主義アカデミー、スターリンの独裁、個人崇拜、集団化、コルホーズ、文化革命、MTC、人民の敵、社会主義的競争、グラウグ、НКВД、社会主義的リアリズム、パスポート制度、欧州の集団安全保障体制、独ソ不可侵条約といった用語を挙げている〔Концепция: 51-52, 55〕。

第8部「ソヴィエトシステムの絶頂と危機」は1945年から91年を対象としており、この期間をスターリン時代の終わり（1946-53年）、非スターリン化と「雪解け」（1953-64年）、安定あるいは「停滞」の時代（1964-82年）、アンドロポフ期（1982-84年）、チェルネンコ期（1984-85年）、ゴルバチョフ期（1985-91年）に区分している。まず第一の時代にはスターリン体制がその地位を国内外で強化しようとしたが、しかるべき回答を見いだせずに終わったとする。その後、政治的自由を求める社会の期待は非スターリン化を実現させたが、一貫性がなく矛盾も多い時代であったと特徴づけている。次にブレジネフ期は20世紀の我が国の歴史のなかで最も安定した時代となったが、1970代末のソ連はすでに経済的・イデオロギー的危機状態にあったとする。この時代には急進的改革に関心のないノームクラトゥーラが資源の輸出に依存し、社会や政治、経済の構造の現状維持の支柱とした。他方で1950-70年代の経済成長は多くの西側諸国を上回り、ソ連の影響で社会主義システムが世界に拡大したとも述べる。科学と学術の分野ではスプートニクの打ち上げや世界初の宇宙への有人飛行に代表される大きな進歩が見られた。しかし、NATOとの軍事的均衡の維持、社会主義諸国への援助や国際共産主義運動と「第三世界」への支援はソ連の財政負担を増大させ、石油輸出への依存を強める結果となった。総じてこの時代の経済の停滞は、1930年代に形成された経済の動員モデルが急激な工業化や戦争、荒廃した経済の復興といった戦時の非常措置が必要とされるような極限状態だけで効果を持つことを示したのであった。改革の必要性は明らかだったが、イデオロギーのドグマがそれを妨げたと述べる。他方で1960-70年代には社会問題に関心が高まり、これは社会主義の理念や全ヨーロッパ的志向とも合致していた。さらに教育の分野では最良のシステムが作り出されたとする。国連の調査によれば当時のソ連国民の教養の水準や識字率は世界で上位を占め、教育システムも多様化した。各共和

国の経済発展の水準を平均化しようとする連邦の政策は目標を達成し、国際主義教育や諸民族の友好のプロパガンダ、民族文化への支援にも多くの関心が集まった。それらは多民族からなるソヴィエト文化の財産と考えられ、ソ連の人々の新たな共通性が生まれたとする「ソヴィエトのナロード」の概念が推進された。こうした成果は民族間結婚の増加が示しており、それを否定することはできないが、それとともに民族間の緊張が消滅したわけではなかったとも述べる。

全体として1960-70年代には短期間で人々の生活水準が向上し、国民は戦時中の貧困とスターリン体制の過酷さを忘れ始めた。日常生活には安定と予見可能性、明日への信頼があり、実質上失業もなくなった。ほぼすべての家庭がテレビや冷蔵庫、洗濯機を所有し、都市部では国営住宅が無料で国民に与えられ、1970年代以降には個人用自動車の大量生産も始まった。にもかかわらず、生活の質は西欧諸国の水準には及ばず、商品の不足と在庫過剰が同時に常態化した。商品の不足は特に地方で目立ち、都市と農村の差が拡大したと述べる。他方でスターリン体制による犯罪の暴露やグラグの廃止、大規模な政治的抑圧の停止は部分的民主化をもたらし、多様な理念的傾向が出現した。これらの変化は少数派ではあったが活発な異論派の運動を引き起こした。しかし経済改革の遅れや、時代が求める改革を実行する能力が政治エリートになかったことが国家にとって致命的となったと述べる。

「ペレストロイカ」の時代には「人間の顔をした」社会主義を目指す改革が始まり、企業や労働組合の自治の拡大、グラスノスチと検閲の部分的廃止、党内民主主義の拡大、「新思考」外交、全人類の価値の優先、「冷戦」の思考様式や西欧諸国との対立の否定が試みられた。しかし1988-89年には政権は状況を統制できなくなり、ゴルバチョフは急進的な民主的反対派と保守的ノメンクラトゥーラという左右の双方から批判されるようになったのであった〔Концепция: 61-66〕。

この時期に関する重要な史実と用語としては、「バンデラ主義者」、コスモポリタニズム、「医師団事件」、「レニングラード事件」、核兵器、「マーシャル・プラン」、「トルーマン・ドクトリン」、「冷戦」、「人民民主主義」諸国、国際連合、コミンフォルムビューロー、NATO、経済相互援助会議、非スターリン化、「雪解け」、ワルシャワ条約機構、平和共存、「第三世界」の諸国、「サミズダート」と「タミズダート」、「60年代人」世代、異論派、ステイリヤーギ、「ソヴィエト的ナロード」の共通性、コスイギン改革、「ブラハの春」、「停滞」、ダーチャ、「ペレストロイカ」、「グラスノスチ」、「新思考外交」、「人間の顔をした社会主義」、反アルコールキャンペーン、人民代議員大会、基幹民族、民族間紛争、「主権のパレード」、国家非常事態委員会などの用語を列挙している〔Концепция: 70-71〕。

次に第9部「1992-2012年のロシア連邦」では、この時期を1991-93年、1993-2000年、2000-12年の3つに区分したうえで、1991-93年を主権国家としてのロシア連邦の形成期であり、移行期とする。この時期には経済的危機のなかでソヴィエト的経済システムが解体され、市場経済の基盤が導入された。1992年1月に実施された「ショック療法」は人々の生活水準を大きく低下させ、急激な改革への批判が高まった。1992年半ばには大統領府と議会の対立が深まり、国家

の分裂と内戦の危機を招いたとする。1993 年 10 月にモスクワで起こった悲劇的事件の後にエリツィンが勝利すると政治システムの重要な転換が起こり、1993 年末にはロシアの国家構造の新原則を定め、現在も効力を持つ憲法が制定された。これとともに現代と革命前のロシアの結びつきを取り戻そうとする試みや、宗教生活の復活という現象が見られたと述べる。次に 1993 年末-99 年には改革の方針が修正され、経済の安定化が試みられたが、チェチェン共和国の状況は悪化した。2000-12 年にはプーチン大統領が国家の安定化と権力の強化に成功し、2008 年の世界的経済危機まで経済成長が続いたとする。2008 年 5 月-2012 年 5 月にはメドヴェージェフが大統領に就任し、経済危機の克服と経済の現代化が試みられた。この時期に始まった歴史的伝統の保護への国家の関心の高まりは、2012 年に大統領に再任したプーチンに引き継がれたと述べる。生徒が学ぶべき重要な用語や史実としては、市場経済、「ショック療法」、「デフォルト」、価格の自由化、私有化、国際通貨基金、G7、憲法裁判所、憲法改革、議会主義、市民社会、オリガルヒ、イスラム原理主義、NATO の東方拡大などの用語を挙げている〔Концепция: 75-77〕。

2.2. 「ロシア史の困難な諸問題」の一覧

「新たな教科書の概念」の巻末には、社会に激しい論争が存在しており、教育が難しいテーマとして「ロシア史の困難な諸問題」の一覧が添付されている。この一覧が挙げるのは次の 20 のテーマである。1. 古代ロシア国家の形成とそこでのヴァリヤグの役割、2. 古代国家のナロードノスチの存在とロシア、ウクライナ、ベラルーシの歴史の共通の基盤としての古代ロシアの遺産の理解、3. アレクサンドル・ネフスキーの歴史的選択、4. ロシア史におけるイワン 4 世の役割：改革とその代償、5. 動乱の時代と宮廷騒動の時代の国家権力の制限の試み、その失敗の原因、6. ウクライナのロシアへの編入（原因と結果）、7. 西欧諸国と比較したロシアの社会的、政治的体制の根本的特徴（農奴制、専制）、8. ピョートル改革の要因、特徴、結果とその代償、9. ロシアの君主制の崩壊とボリシェヴィキの政権奪取、内戦での勝利の原因と結果、評価、10. ネップの終焉、工業化と集団化、文化の領域の再編の評価、11. ボリシェヴィキの民族政策の特徴とその評価、民族問題の解決の形式としてのソヴィエト連邦、連邦からの自由な離脱権、12. 一党制とスターリン独裁の確立の要因、結果と評価、抑圧の原因、13. 第二次世界大戦直前と初期のソ連の対外政策の評価、14. 大祖国戦争での勝利の代償、15. 「冷戦」期のソ連の評価、16. フルシチョフ改革の要因、結果、評価、17. ブレジネフ期と異論派の運動の役割の評価、18. 「ペレストロイカ」とソ連の解体の要因、結果、評価、19. 1990 年代初頭の経済改革の要因、特徴と結果の評価（「ショック療法」、民主化の方法）、エリツィンの勝利の要因と結果、20. 2000 年代のロシアの経済的、政治的システムの安定の要因と結果、その評価。これらのテーマのうちウクライナの編入や 2000 年代の経済・政治のシステムの安定化は 20 世紀だけに関わるものではないが、それを除いても半数以上が 20 世紀に起こった出来事であり、20 世紀史が社会的論争の対象であり続けていることがうかがわれる。「概念」はこれらの問題について教師用参考書を作成して最も広く普及している見解を示し、それによって「統一された学術・教育の空間」を形成すべきだと提言している

〔Концепция : 80〕。

3. ドロファ社の 20 世紀ロシア史教科書の描写

前述のように「新たな教科書概念」を基準とした審査の結果、最新の推薦教科書一覧に掲載されていた 20 世紀ロシア史の教科書はすべて不合格となり、それに代わって新たに作成された 3 社の教科書が一覧に加わることになった。本節ではこのなかからドロファ社の O.B. ヴォロブエフ、С.П. カルパチョフ、П.Н. ロマノフ著『ロシア史：20 世紀初頭-21 世紀初頭』の大祖国戦争期以外の記述を紹介する（注 1）。

まず従来の推薦教科書には、教育科学省の推薦制度の審査を担うロシア科学アカデミーとロシア教育アカデミーによって肯定的に評価されたことが記されていたが、本書には「ロシア歴史協会により認証された」と記述されている。次に本書は全 5 章からなり、第 1 章は第一次世界大戦から内戦期まで、第 2 章は 1920-30 年代、第 3 章は大祖国戦争、第 4 章は戦後からソ連の解体まで、第 5 章は 1992 年から 2014 年のロシア連邦を扱っており、大祖国戦争の占める割合が比較的大きい。冒頭では、この教科書の特徴は「準備された答えを暗記するのではなく、生徒が自ら問いを考え、それに対する自分の回答を模索することを提案する」ことにある（強調は原文）〔Волобуев 2016 : 3〕と述べ、節や章の末尾にその題材となるような課題を掲載している。この点は従来の推薦教科書と同様だが、これに加えて本書は各章の冒頭に当時の文書やポスターなどの史料を掲載し、それをもとに章の主要な問題を考えることも課題に加えている。例えば第 1 章の冒頭にはニコライ二世の退位の宣言と 1917 年 10 月のレーニンの演説の一部が掲載されている（Волобуев 2016 : 6）。「新たな教科書概念」は歴史教科書の役割について、以前は情報の提供と史実の解釈の提示が教科書の課題だと考えられてきたが、今日では生徒が自主的に考え、歴史的な文書を分析し、結論を導き出せるようになること、つまり生徒の歴史的思考を形成し、発展させるための手段と考えられているとし、現代の教科書は資料から歴史的知識を導き出せるよう生徒を促さなければならないとしており〔Концепция : 11-12〕、本書の工夫は「概念」の教科書の位置づけとも一致しているといえる。

巻末には重要な用語の解説や参考図書のリストに加えて、サミズダートのアンソロジー、アレクサンドル・ヤコヴレフのアルヒーフ、モスクワ大学歴史学部図書館、1930-34 年の飢餓に関する情報、レニングラード封鎖、大テロルに関する情報、カティンの森事件に関する情報、「メモリアル」のホームページ、第一次世界大戦や大祖国戦争、革命と内戦についてのポスターや写真を集めたサイトなど、インターネット上で閲覧できる資料の一覧も掲載されている〔Волобуев 2016 : 354-365〕。

教科書が扱う第一次世界大戦から今日までの時代については、私たちの祖国は「多くの英雄的偉業と恐ろしい悲劇」を経験したと述べるとともに、「あなたは教科書や研究書に書かれている歴史だけでなく、私たちの両親や祖父母の記憶の中に生きる歴史について学ぶことになる」とし、

そこにはロシアの住民一人一人が誇ることのできる出来事とともに、国家の発展のためにどのような道を選ぶべきなのかを考えさせる教訓を見出すこともできると述べる。それゆえ祖国の現代史は社会的論争の対象となり、それを深く考えることは市民的義務に対する自覚的な愛国主義的態度の前提となると教科書は説明する〔Волобуев 2016 : 5〕。以下では十月革命後を中心に、大祖国戦争期以外の描写を検討する。

まずロシアの内戦の特徴として期間の長さや広大な範囲、被害の大きさを挙げたうえで、政治的、社会・経済的、宗教的、民族的対立といったいくつもの対立軸が交差し、外国軍の干渉も加わることによってさらに複雑な状況が生み出されたとする。このなかで赤軍は武力で権力を奪取しようとし、それに対抗した白軍は当初は解放者として歓迎された。しかし白軍も同様に支配地域で軍事独裁を確立し、ボリシェヴィキとその支持者を銃殺したと述べる。さらに「単一で不可分のロシア」の復活を呼びかけたことは、自治を期待する諸民族を失望させた。権力を掌握したボリシェヴィキは自らを「労働者・農民」の権力と宣言し、労働者に社会主義のもとでの明るい将来を約束した。平和と土地に関する決定はその人気を高め、反対派との闘争の必要性が、不平等な講和条約や食糧独裁、テロルといった人気のない政策を正当化することを可能にした。ボリシェヴィキは強力なプロパガンダ組織を作り、緊急の問題に関するスローガンを打ち出すことで大衆を革命の理念とスローガンに引きつけ、容易に反対派に勝利したとする。これに対して白軍の将校たちは自らの闘争の目的を明瞭に説明することができなかった。統一された指導部を持つボリシェヴィキとは異なり、反ボリシェヴィキ勢力には共有された理念や協力関係は存在せず、それぞれの活動の場所も離れていたことがボリシェヴィキの勝利を確実にした。内戦の犠牲者は1200-1300万人に及び、その半数が飢餓や伝染病の犠牲者であった。さらに亡命者もおよそ200万人に及び、経済は崩壊したと教科書は述べる〔Волобуев 2016 : 62-63, 72〕。

農業集団化については、「クラーク」に明確な定義は存在せず、豊かな農民やコルホーズの拡大に不満を表明した農民がクラークとみなされたとし、1932年1月までに140万人がシベリアや北部地方に追放され、1929年には農村地域で1万人のソヴィエトやコルホーズの活動家が殺害されたとする。これに対して100万人以上の農民がヴォルガ沿岸、北カフカース、ウクライナ、シベリアで騒乱に加わり、家畜の殺害が広まった。この騒乱の規模に驚愕した指導部は政策転換を余儀なくされたと教科書は述べる。集団化による損害と1931-32年の不作は飢餓を拡大させたが、当時の報道は社会主義建設の成功を大々的に宣伝するばかりで、この悲劇には一言も言及しなかった。飢餓に苦しむ人々への政府の援助は皆無であり、飢餓の実態も調査されなかった。様々な研究の調査結果から、ウクライナ、北カフカース、ヴォルガ沿岸、カザフスタンで270万人から450万人の死者が出たと考えられていると教科書は説明する。

他方でスターリン期には識字率の向上や成人を対象とする学校や講座の設置、無償の普通教育、都市部での7年制義務教育、浮浪児のための施設の設置が実施され、識字率は1926年の56.6%から1939年には87.4%に上昇したと説明している。さらに工業分野では中等・高等教育機関が急速に増大し、多くの専門家が育成された。社会科学に対する厳しい統制とは異なり、自然科学

の分野では Н.И. ヴァヴィーロフや А.Ф. ヨッフエ、П.Л. カピッツァらの業績に代表されるような研究の進展が見られたとも述べている。1920年代から39年までの外交政策については、ポリシェヴィキの対外政策は初期から二面性を持ったとし、革命運動や反植民地主義運動を他国に広めると同時に、資本主義の包囲のなかで政治の安定化と経済復興を実現するには外側の世界と現実的關係を構築する必要があり、この二面性は長期に及ぶソ連外交の特徴となったと説明している〔Волобуев 2016 : 103,106, 126-127, 134〕。

生徒への課題としては、なぜ多くの研究者がスターリン期の工業化とピョートル一世期、19世紀末の近代化に類似点を見出しているのかという問いや、それらの類似点と違いを考えるという課題、ソ連の工業化とその結果の特徴を指摘し、工業化は成功したと言えるのかという問いについて具体的な史実を挙げて自分の意見を説明するという課題が提示されている。また集団化については、その目的と結果、社会的代償について説明するという課題、1932-33年の飢餓の原因とこの飢餓がウクライナでどのように呼ばれているかを調べるという問題や、飢餓はそれが拡大した地域の民族構成と関係があるかといった問いが掲載されており、ウクライナとロシアの歴史論争を学ばせようとしている。次にスターリン期の政治的抑圧に関しては、インターネット上のサイト「グラウグについての回想とその著者」を利用して抑圧の犠牲者となった人々の生涯について発表するといった課題や、なぜ1930年代には多くの人が強制収容所や刑務所に収容された人々が実際に罪を犯したと信じたのかを考察するという課題が掲載されている。飢餓についての問題と政治的抑圧に関する課題はともに、2013/14年度の推薦教科書に指定されていたスホフ編の教科書にも掲載されており〔Сухов 2013 : 183, 194〕、従来の推薦教科書の成果を取り入れていることがわかる。また工業化と集団化による社会構造の変化のうち最も重要だと考えるものを挙げ、その理由を説明し、その変化のなかで肯定的な面と否定的な面を挙げ、その理由を答えるという問題も掲載されている。さらに芸術分野については、1930年代の人々の生活の特徴を表している芸術作品の一つを選び、どの程度その特徴が正しく表現されているかを分析するという課題や、芸術や学術への政治の介入の事例を挙げるとともに、その介入の結果は肯定的だったか、否定的だったかを考察するという課題が提示されている。宗教に関しては、なぜロシア正教会や他の宗教組織が激しい批判の対象となったのかという問題や、カトリック教徒、プロテスタント、ムスリム、仏教徒、ユダヤ教徒はどのような迫害を受けたのか、一つの宗教を選んで発表するといった課題が示されている。大祖国戦争の直前の時期に関する生徒への質問のなかには、カレリア地峡、バルト三国、西ベラルーシ、西ウクライナ、北ブコヴィナ、ベッサラビアのソ連への編入について、その過程だけでなく地域住民の反応を調べ、これらの地域の編入に共通する特徴と差異を検討するという課題が提示されている。さらに国外にいたロシア人亡命者は1939-41年の出来事をどのようにとらえたのか、ヒトラーのドイツとの友好関係や新たな領土の編入といった当時の状況をソ連の人々はどう理解したのか、回想や手紙などの史料を利用して考えなさいという問いも掲載されている〔Волобуев 2016 : 106, 109, 111, 115, 123, 132, 148-149〕。

第二次世界大戦後からソ連の解体までを扱う第4部では、まず戦後復興の難しさを強調すると

もに、C.A. バンデラが率いるウクライナ民族主義者組織やバルト諸国での反ソヴィエト組織の活動など、1950年代まで民族組織の抵抗運動が続いたことが説明されている。戦後の内政については、一面では戦勝がスターリンの個人独裁をさらに強化したが、他面では戦線から兵士が戻り、国民の間によりよい生活への期待が広まったことが、コルホーズを解散させるべきだといった見解や日用品への投資を増やすべきだ、官僚主義と戦うべきだといった共産党体制にとって危険だと思われる見解を広め、それがレニングラード事件や Г.К. ジューコフ将軍の降格、ユダヤ人反ファシスト委員会の抑圧、医師団事件などの戦後の政治的抑圧の強化をもたらしたとする〔Волобуев 2016 : 207-208, 210-211〕。

次に冷戦の始まりについては、大国の指導者のイデオロギーと主観が資本主義諸国と社会主義諸国の対立を深刻化させたとし、ソ連の指導者は資本主義システムのなかでは戦争は不可避であるというマルクス主義の命題を前提としていたと説明している。ソ連によって解放された中東欧諸国では「ソヴィエト化」が実施され、ソ連とこれらの諸国の間には経済援助と政治的・イデオロギー的強制によって成り立つ関係が形成されたと述べる。1950-60年代については、冷戦からの脱却を目指すと同時に、社会主義圏や発展途上国への支援は常に内政干渉や社会主義圏に引き入れようとする試みを伴い、それが外交政策の矛盾を生み出したとし、この矛盾は政策の効率性を低下させ、多大な財政負担を必要としたと説明している。1956年11月のハンガリーへの軍事介入については、1992年にエリツィン大統領がハンガリーを訪問した際に公式に謝罪したことが説明されている〔Волобуев 2016 : 217, 219, 242, 245-246〕。

フルシチョフ期の政治改革については、第20回共産党大会は共産主義の神話と共産主義システムに深刻な打撃を加えたとし、その後も思想の自由は許容されなかったが、「恐怖による支配」は社会のあらゆる分野で弱まったと述べる。それと同時にスターリン期にキャリアを形成した党官僚たちは非スターリン化への妨害を繰り返したと説明している。1960年代には民主化を促進しようとする「60年代人」と呼ばれる世代が登場し、共産党の批判は禁じられているにもかかわらず、スターリン主義者と60年代人の間に激しい論争が存在した。彼らの多くが体制内での民主化改革を要求したが、その一部はより急進的な改革を求めたと説明されている。

異論派の運動については、西欧で作品を出版したために逮捕された作家 Ю.М. ダニエルと А.Д. シニャフスキーが1966年に禁固刑を言い渡されたこと、1965年12月のスターリン憲法記念日にモスクワで民主的自由に関する憲法の規定を守るよう要求するデモンストレーションが行われ、この日が人権擁護運動の始まりの日と考えられていることが説明されている。それとともにグルジアやウクライナでの民族運動も続き、ロシアでは А.И. ソルジェニーツィンが民族運動の中心となったことや、信仰の自由を求める運動など多様な社会思想が共産主義体制の内部で生まれたことも記述されている。総じてソ連における異論派の運動は多様であっただけでなく、主に知識人を中心とする少数派のグループからなり、何らかの社会的基盤を持っていたわけではなかったと教科書は述べ、その市民的勇気を正当に評価するとともに、これらの運動がカウンター・エリートの性質を持たなかったことを指摘しなければならないとする。当時の政治システムにつ

いては、エリートの交代がなくなった結果形成された長老支配は時代の要請に応えられなかっただけでなく、それを適切に評価することもできず、経済や科学技術、社会関係の停滞を招いたとして、社会・経済システムとしての社会主義、理念・政治システムとしての共産主義の双方が終わりを迎えたと述べる〔Волобуев 2016 : 249, 251, 254, 266-267, 270-271〕。

この時期については、スターリン批判が与えた印象について年配の人々に質問し、それに対する彼らの考えと感情について発表しなさいといった課題や、異論派の活動に対して人々はどのように反応したのか、彼らの活動について何か知っていたか、知っていた場合はどのように知ったのかを質問しなさいといった課題が掲載されている。さらに「60年代人」について、あなたが重要だと考える3つの社会文化的特徴を挙げなさいという問題も示されている〔Волобуев 2016 : 228, 252, 267〕。

ベレストロイカの直前までの内政や社会の状況を総括した部分では、社会主義は効率的な動員によって工業化や経済の軍事主義化という課題を急速に解決することができたとし、これが大祖国戦争での勝利の基盤になったと述べる。他方で社会主義システムにとって特徴的だったのは労働生産性の低さであり、世界経済の歴史は官僚が常に個人経営者に敗北すること、官僚主義のシステムが学術や技術の達成を即座に生産に活用することができないことを示しているとする。国家財産の占有は社会や経済組織の利益を擁護する多様な団体の形成を妨げ、政治と社会の自由や民主主義の基盤が作られることはなかった。さらに選挙という民主的プロセスが欠如していたことからエリートの交代はほとんどが大テロルのような政治的抑圧によって起こり、その後政治的抑圧が否定されるとエリートの交代が停止し、長老支配が形成されたと述べる〔Волобуев 2016 : 270〕。

次に1960半ば-70年代末の対外政策については、ブランドの「東方政策」が国際関係の緊張緩和に大きな役割を果たしたとし、ヨーロッパの緊張緩和はソ連とアメリカの関係も改善させたとする。「デタント」のピークとなったのは1975年にヘルシンキで開催された欧州安全保障協力会議であり、軍事分野での信頼醸成、経済や学術、技術、自然環境の保護の分野での協力の拡大、人権保護の義務や情報、文化、教育などの自由の保障について合意が形成されたと説明している。この結果、ソ連は先進国との技術協力や投資を利用することが可能となり、穀物などの輸入は大幅に増大した。しかしソ連は常に基本的人権を順守したわけではなく、発展途上国に影響を拡大するための闘争も活発に行った。後者は「デタント」の失敗と1980年代初頭の国際関係の緊迫化の主要な要因となった。1970年代のアフガニスタン侵攻や東欧諸国への中距離弾道ミサイルの配置は、ソ連と西欧諸国を再び冷戦状態に置くことになったと教科書は述べる〔Волобуев 2016 : 273-275〕。

社会主義諸国については、1956年にハンガリーの革命とポーランドの動乱を鎮圧したソ連は東欧諸国の状況の安定化に成功したかのように見えたが、社会主義諸国の亀裂は作られ続けていたとし、ソ連の東欧諸国への統制を強化する契機となった事件として1968年の「プラハの春」とワルシャワ条約機構による軍事介入を詳細に説明している。ここには戦車の上に乗ったソ連の

兵士をプラハ市民が取り囲む有名な写真を掲載し、「憤慨したプラハ市民の話を書くソヴィエト兵士」というキャプションをつけている。またポーランドで「連帯」が誕生した背景やワレサの経歴を詳述するとともに、共産主義運動のヘゲモニーをめぐる中国との政治的、軍事的衝突についても記述している。中国の軍事的プレゼンスの増大や領土要求は東方での国境防衛の強化をソ連に余儀なくさせ、社会や経済の発展に使われるべき財源が軍事費として使われたとする。概してこの時期の対外政策は「デタント」の成果にもかかわらず非常に大きな負担となり、社会や経済、文化の発展を妨げ、ソ連の解体の要因の一つとなったと教科書は説明している。これに関する生徒への課題としては、社会主義諸国との関係でソ連はどのような問題に直面していたのかといった問いや、B. ヴィツキーの詩のなかから「無知な人々を横柄に見下している 僕は彼らとそれほど違わない ーブタペストは棘を残さない プラハが私の心を張り裂くことはない」という部分を紹介し、このような詩人の立場をどう説明するかといった課題が提示されている〔Волобуев 2016 : 276-278〕。

次にゴルバチョフ期の内政や経済政策については、ゴルバチョフを描いた 1988 年と 1991 年の対照的な二枚のポスターを並べて掲載し、改革への国民の期待が失望に変わったことを示している。他方で「グラスノスチ」はスターリンによる抑圧の犠牲者の名誉回復を促進し、プハーリンやリコフ、ジノヴィエフ、カーメネフといった政治指導者も我々の歴史に戻ってきたと説明する。民族問題については、多民族国家であるソ連では民族間の対立は常に経済的、政治的危機に結びついたとし、当時のソ連ではこれがいくつかの要因によって悪化したと述べる。その要因の一つは、社会主義体制とソヴィエト権力が諸民族の歴史的特性を考慮せず、伝統的な経済構造や習俗を破壊し、イスラム、仏教、シャーマニズムを攻撃したことにより、二つ目の要因はバルト諸国、西ウクライナ、モルダヴィアなど、大祖国戦争の直前にソ連に併合され、併合の直後とナチスの占領からの解放直後に二度の「粛清」を経験した地域で特に強力な民族主義的気運が出現したことであった。三点目としては、大祖国戦争期に追放され、その後故郷に帰還したドイツ人やクリミア・タタール人、チュルク・メスヘチア人などの諸民族にとって、その屈辱的経験の記憶がまだ新鮮であったこと、四点目には慢性化した歴史的紛争の例として、ナゴルノ・カラバフのアゼルバイジャン共和国からの独立要求やアブハジアのグルジアからの独立要求を挙げている。これに加えて、ペレストロイカ期の民族運動や民族主義運動のうち最も重要なものとして、バルト諸国の「人民戦線」やアルメニア人の「カラバフ」、ウクライナの「ルフ」、ロシアの「パーミヤチ」を紹介している。この時期についての生徒への課題にはブレジネフ期と同様にインタビューを用いるものがあり、例えばペレストロイカ期の生活について自分の家族や年配の人々の回想を収集・分析し、発表するという課題が掲載されている〔Волобуев 2016 : 286, 289, 291, 298〕。

ソ連の解体について述べた部分では、1991 年 8 月の反ゴルバチョフ派によるクーデターとゴルバチョフの総書記からの辞任、共産党の解党は党 = 国家体制の終わりを意味しただけでなく、政治的、イデオロギー的、組織的なソ連共産党の瓦解とソ連の解体を意味したと述べる。また 1993 年秋の政治危機を「悲劇的事件」とし、1991 年の夏がソ連共産党とすべての共産主義体制

に対して破壊的な打撃をもたらしたとすれば、1993年10月は最高会議を解散させ、大統領の影響と権力の強化を招いたことによって最高会議から権力を奪ったと説明している。この時期に関する生徒への課題の一つは、エリツィンの側近E.T. ガイダールの回想と憲法裁判所のB.Д. ゴリキンの回想を紹介している。前者は、議会には大量の武器が蓄積されており、もしそれが戦闘に使われていれば内戦が始まっただろうと述べて、我々には内戦を阻止するという結論しかなく、内戦という「伝染病」と「戦争のウイルス」を取り除くには平和的交渉や社会の平穏は必要ではなかったとしてその成功を強調する。これに対してゴリキンの回想は、「10月3-4日はロシアの歴史に最も暗いページの一つとして加わるだろう。この日、市民の不可侵性が根絶された。二重権力だけでなく、三権が根絶された、つまり、憲法の権力分立の原理が。事実上大統領は反憲法的クーデターを行い、国家体制を破壊した」と批判している。教科書はこれらの回想を比較することを生徒に求め、どちらがより事件の本質を表していると考えるか、大統領と議会支持者の妥協の可能性は尽きていたのか、その後の議会支持者の恩赦は正当だったかという問題を提示している〔Волобуев 2016: 297-298, 307〕。

終わりに

ドロファ社の20世紀ロシア史教科書を概観すると、「新たな教科書概念」が示す各時代の解釈に内容を適合させながら、内戦やスターリン体制、戦後の安定と「停滞」など「ロシア史の困難な諸問題」の一覧」が挙げる論争的なテーマについて、その肯定的側面と否定的側面の双方を示そうとする方針が見受けられる。これは従来の教育科学省の推薦教科書一覧に掲載されていた20世紀史教科書と共通する特徴である。それと同時に生徒への課題を用いて、生徒自身に史実の意味を検討させるとともに、史実の解釈の多様性や解釈をめぐる政治的対立の存在を教えようとする点も以前の推薦教科書と類似しており、それらと同じ課題を掲載している部分もある。したがって2013年以降の「新たな教科書概念」の作成や推薦制度の変更、推薦教科書の大幅な減少といった変化にもかかわらず、ドロファ社の教科書の記述を見る限りでは、推薦教科書の内容には大きな変化はないと言えよう。他方で、ロシア歴史協会が審査の主体となるという自国史教科書の新たな推薦制度が、世界史や歴史以外の科目の教科書の推薦制度に与える影響については、今後さらなる分析が必要である。さらに最新の推薦教科書一覧に加えられた他の2冊の20世紀ロシア史教科書の記述をドロファ社の記述と比較し、それらの共通点と差異を検証することも今後の課題としたい。

(本稿は科研費(25284149)、(13J02402)、(24242029)の助成を受けたものである。)

注

(1) 大祖国戦争期については、立石 近刊参照。

参考文献

- Концепция нового учебно-методического комплекса по отечественной истории в
 PDF, <http://rushistory.org/proekty/kontseptsiya-novogo-uchebno-metodicheskogo-kompleksa-po-otechestvennoj-istorii.html#histcult> (2015 年 12 月 21 日確認)
- Волобуев, О. В., Карпачёв, С. П., Романов, П. Н.
 2016 История России : начало XX–начало XXI в. 10 кл. : учебник. М. : Дрофа.
- Вяземский, Е.Е.
 2014 О разработке концепции нового учебно-методического комплекса по отечественной истории, Преподавание
 Истории и Обществознания в Школе(ПИОШ) 1 : 53–58.
- Кочегаров, К.А.
 2013 Страсти по единому учебнику истории, ПИОШ 8 : 49–52.
- Лазебникова, А.Ю., Королькова, Е.С.
 2014 Поиски форм стандартизации содержания образования в 1990-е гг., ПИОШ 5 : 14–20.
- Сухов В.В., Морозов А.Ю., Абдулаев Э.Н.
 2013 История России. 6-е изд. М.: Мнемозина.
- 立石洋子
 2015 「現代ロシアの歴史教育と第二次世界大戦の記憶」『スラヴ研究』 62 : 29–55.
- 立石洋子
 近刊「現代ロシアの歴史教科書が描く第二次世界大戦と大祖国戦争」『ユーラシア研究』 53 : 9–14.

